長春閣鑒賞

第四集

4

長春閣鑒賞

第四集

長春閣鑒賞第四集目次

第三十一　戲嬰圖　傳蘇漢臣筆　雙幅之一

第三十二　牧童圖　傳范寛筆

第三十三　風雨山水圖　夏珪筆

第三十四　草座釋迦圖　傳李龍眠筆

第三十五　出山釋迦圖　傳李龍眠筆

第三十六　丹霞靈照圖　傳李堯夫筆

第三十七　彌勒菩薩像　筆者不詳

第三十八　觀音大士像　筆者不詳

第三十九　准胝觀音像　筆者不詳

第　四　十　壯丹白鷴圖　傳王若水筆

第四十一　花鳥圖　王立本筆　雙幅之一

第四十二　花鳥圖　王立本筆　雙幅之一

第四十三　壯丹花圖　傳徽宗皇帝筆

第四十四　寒汀雪鷺圖　傳徐熙筆

第四十五　麝猫圖　宣宗皇帝筆

第四十六　水仙圖　傳陶復初筆

第四十七　墨梅圖　傳陸復筆

第四十八　傳説耕野圖　傳馬興祖筆　雙幅之一

第四十九　孔明草廬圖　傳馬興祖筆　雙幅之一

第　五　十　山水圖　傳劉松年筆

第五十一　阿彌陀如來圖　傳呉道子筆

第五十二　羅漢圖　傳禪月筆

第五十三　華陽眞人影　傳西金居士筆

第五十四　少康法師圖　傳西金居士筆

第五十五　天台大師影　傳西金居士筆

第五十六　草衣文殊像　傳雪澗筆

第五十七　漁樂圖　葉廣筆

第五十八　蓮花圖　筆者不詳　酒井抱一補筆

第五十九　樓閣山水圖　睡猿筆

第　六　十　達磨大士像　陳賢筆

第六十一　柳塘戲鴨圖　沈南蘋筆

第一　拾得圖　傳顔輝筆　雙幅之一

掛幅　絹本淡彩　竪四尺二寸一分　横一尺三寸八分
表裝　一文字丹地古金襴本願寺切　中白茶地古金襴本願寺切
　　上下萠黄地古金襴

元の顔輝字は秋月、江山の人なり、善く道釋人物を畫くと圖繪寶鑑に見ゆるのみ、惜むらくは斯の巨匠、夙くその傳を逸して委曲を詳にすること能はず、この集にはその筆と傳ふる寒山拾得、及び觀音大士を選ぶ、就中寒拾の雙幅はもと東山の御物にして織田信長に傳はりしが、元龜天正の際、信長、石山本願寺の顯如と戰ひ、和議成るに及びて末松山の盆石、一文字の茶碗及び此の畫幅を贈りて修好の意を表し、爾來傳へて本願寺にあり、安政年中本願寺に事ありて大阪の賈人某の手に歸し、其後轉輾して終に家藏に入りしものなりといふ、秋月の名を冠して我が邦に傳ふる遺作其の數に乏しからずと雖も、この圖の如きは、正に首に一指を折るを憚らざるものにして洵に銘心の絶品なりといふべし。



第二　寒山圖　傳顏輝筆　雙幅之左

　　拾得圖　傳顏輝筆　雙幅之右

掛幅　絹本淡彩　各竪四尺二寸一分　橫一尺三寸八分

表裝　一文字丹地古金襴本願寺切　中白茶地古金襴本願寺切

　　上下萠黃地古金襴



第三　觀音大士圖　傳顏輝筆

掛幅　絹本淡彩　竪三尺六寸九分　橫一尺九寸二分



第四　六祖挾擔圖　傳率翁筆

掛幅　紙本水墨　竪三尺七分　横一尺三分

率翁は支那の畫史にその傳を得ず、唯だ我が能阿彌の手記たる君臺觀左右帳記に元人の下にこの名を擧げたるのみ、この圖傳へてその人の筆となす、然れども今此の印文を撿するに率翁にはあらずして栗翁と讀まるべし、固より栗翁の何人なるや明ならず、思ふに亦所謂率翁と同樣、南宋禪教の興隆と共に現出したる幾多の減筆畫家中の一人なるべく、且つこの作によりてその畫技の頗る卓拔なるを知る、景德傳燈錄を按ずるに、六祖慧能大師少かりしとき、家尤も貧窶なり、一日薪を負ふて市中に至り、客の金剛經を讀むを聞き、悚然として問ふて曰く、此れ何の法ぞや、何人に得たると、客曰く、此れは金剛經と名け、黃梅の忍大師より得たりと、師直に去つて五祖弘忍に參し、遂に衣法を傳ふ、この圖卽ち之を畫きしなり、贊者偃溪黃聞禪師は浙翁如琰の法嗣にして、南宋の景定四年六月、壽七十五にて示寂せり、その語錄の中に六祖挾擔と題する六言あり、曰く、柴已落在誰家、此行不空來去、手中擔子相隨、心知應無所住、と、この擔子全肩荷負云々の語と大同小異なり、蓋し前人の題贊、多く胸臆熟する所の文字を選ぶを以て、時に類似あるを免れず。



第五　桓野王圖　錢舜擧筆

掛幅　絹本著色　竪二尺八寸四分　横九寸九分

晋書を按ずるに桓伊、小字は野王、音樂を善くし、蔡邕の柯亭笛を得て常に自ら之を吹く、王徽之の京に赴くや、舟を青谿の側に泊す、伊素より相識らず、岸上を過ぐ、徽之便ち人をして之に謂はしめて曰く、君が吹笛を善くするを聞く、試に我がために一たび奏せよと、伊便ち車を下り胡床に踞し、爲めに三調の弄をなし、訖りて車に上り去る、客主一言を交へずと、後人傳へて佳話となす、この圖卽ち此の人の像を畫きしものなり、筆路尤も輕圓明秀、能く翩翩たる公子の風丰を傳へ得たり、元の錢選字は舜擧、別に巽峯、玉潭、習嬾翁、霅川翁、淸癯老人等の號あり、宋末景定年間の鄉貢進士なり、その畫、人物花鳥山水は趙昌を師とし、靑綠は趙千里を師とし、尤も折枝花を善くす、趙子昻も亦嘗て之に從つて畫法を問ひしことあり、子昻元に仕へてより、諸公皆な相附して達官を取る、舜擧獨り齟齬して合はず、詩畫に流連して以て其の身を終れり。



第六　蛺蝶罌粟圖　傳錢舜擧筆

掛幅　絹本著色　竪一尺九寸五分　横一尺二寸二分



第七　四睡圖　因陀羅筆

掛幅　紙本水墨　竪一尺一分　横一尺一分

表裝　中紺地印金　一文字柿地紗　上下絓

因陀羅は君臺觀左右帳記に印陀羅に作り、元人の部に列し、天竺寺の梵僧にして人物道釋を工にするを注せり、然れども元末の楚石禪師語錄を撿するに、因陀羅所畫十六祖讃、因陀羅所畫諸聖讃等の詩あり、而して現存する因陀羅筆と傳ふるもの、亦た多く楚石の讃を伴へり、卽ち左右帳記の印字は因字の訛傳なるを知るべし、又按ずるに豐干禪師は何の許の人なるを知らず、虎に騎りて天台國淸寺に入り、遂に之に居る、衆僧驚畏す、獨り寒山及び拾得の二人と相親む、寒山は始め豐縣の西なる寒巖中に居れるを以て寒山子と名く、拾得は豐干赤城山中を行き、道側に年數歲ばかりなる小兒の啼けるを見、擕へて國淸寺に至り、因て拾得と名けたり、四睡は卽ち豐干睡り、寒山睡り、拾得睡り、虎も亦た睡るを謂ふ、靜寂化脫、證空の妙悟、一に這裡にあり、洵に絶好の公案にして又絶好の畫題なり。（此の畫別に探幽の摹本を添ふ）



第八　寒山圖　因陀羅筆

掛幅　紙本水墨　竪二尺七寸八分　橫一尺七分

表裝　一文字紫地印金　中時代紗　上下無名緞子

這風狂漢、示直指禪、偸眼戯笑、意氣衝天の四句を題するものは玉室宗珀禪師、京都大德寺の住僧なり、平安の人、姓は園部氏、自ら曈眠子と號す、法を春屋宗園に嗣ぐ、乃ち春屋の俗姪なり、加賀の國主嘗て先妣の爲めに芳春院を本山に創め、師を請じて主たらしむ、特に直指心源禪師と賜ふ、寛永十八年五月十四日示寂す、壽七十。



第九　出山釋迦圖　傳胡直夫筆

掛幅　紙本水墨　竪三尺五分　横一尺五分

胡直夫は君臺觀左右帳記に元人として著錄せらる、而るに希叟和尚廣錄を按ずるに、題直夫牛圖といへる七言絕句あり、希叟は南宋淳祐、景定、咸淳頃の人なれば、若しこの直夫が左右帳記の直夫と同一人なりとすれば、能阿彌の元人とせるは訛傳なるべし、而して此の畫の賛者太白西巖も亦略ぼ希叟と同時代なりとす、然れども今傳世の胡直夫と稱せらるゝものを見るに、皆な無款にして、且つ一手に出でたるものにあらざるが如し、されば吾人は此の畫を直夫の筆とするの傳說に多大の信賴を措かず、寧ろ賛者西巖の名によりて、直に時代を判定せんと欲す、西巖了慧禪師は蜀の蓬州羅氏の子なり、無準師範に嗣ぐ、定慧、能仁、東林、天童諸寺を董し、咸な偉績あり、南宋景定三年三月十一日示寂す、壽六十五なり、此の圖の題語、夜半見明星云々の句は出山相と題して現存の語錄に見ゆ。

句は出山相と題して現存の語錄に見ゆ。

り、南宋景定三年三月十一日示寂す壽六十五なり、此の圖の畫者直翁は[illegible]の
蜀の蓬州羅氏の子なり、無準師範に嗣ぐ、定慧院仁、東林、天童諸寺を董し、威な偉績あ
を樹つ、寧ろ畫者西蜀の名によりて直に時代を判定せんと欲す、[illegible]は
のにあらざるが如し、されば吾人は此の畫を直夫の筆とするの傳說に多大の信用
傳世の胡直夫と稱せらるゝものを見るに、皆な無款にして、且つ一手に出でたるも
るべし、而して此の畫の筆者たる白西蜀も亦時代は希叟と同時代なりとせば、然れども今
この直夫が左右帳記の直夫と同一人なりとすれば、能阿彌の元人とせるは誤傳な
に題直夫牛圖といへる七言絕句あり、希叟は南宋末、景定、咸淳頃の人なれば、若し
胡直夫は君臺觀左右帳記に元人として著錄せらる、而るに希叟和尚語錄を檢する

附圖　紙本水墨　竪三尺五分　横一尺五分

第九　出山釋迦圖　傳胡直夫筆



第十　游魚圖　傳賴庵筆　雙幅之一

掛幅　絹本水墨　竪一尺四寸三分　横一尺六寸

君臺觀左右帳記元朝の條に、賴庵を中上品に列し、且つ蓮、魚、龜といへり、然れども賴庵といふもの、支那の畫傳に其の名を見ず、思ふに賴庵の名を以て我が邦に存せるものは多く水魚を畫けるものにして、この畫も亦其の筆なりと傳ふ、確證あるに非れども、その畫致を觀るに、胡元を下らざること疑なし、一幅は鯉魚を畫き、一幅は鱖魚を畫く、水墨の暈染最も輕妙にして、能く浮游して依る所なきが如きの態を得たり、憶ふに此くの如き手法を以て水魚を畫くことは、先に已に南宋寶祐の畫院待詔に范安仁あり、而して我が邦亦間〻安仁の作品を傳ふ、その畫致頗る謂ふ所の賴庵に近し、蓋しその安仁といひ、賴庵といふは暫く後人の假托に出でたりとせんも、この種畫魚法の已に南宋に萠せることは疑ふべからず、因て以てその由來する所の遠きを知るに足らん。



第十一　游魚圖　傳賴庵筆　雙幅之一

掛幅　絹本水墨　竪一尺四寸三分　横一尺六寸



第十二　仙客評畫圖　傳馬遠筆

掛幅　絹本淡彩　竪三尺九寸二分　横一尺九寸三分

表裝　一文字風帶紺地金襴　中茶地紗金　上下焦茶緞子

宋室畫院に待詔たるもの、其人甚だ多し、然れども馬氏一族の如く歴世奉仕して、而かも能畫の名を擅にしたるものなし、始め宣和の畫院に馬賁あり、その後に馬興祖あり、興祖の子を公顯となし、世榮となす、世榮の子に逵及び遠の兄弟あり、遠の子に麟あり、就中遠を以て最も傑出したるものとなす、遠は字を欽山といひ、南宋光宗寧宗の兩朝に畫院待詔たり、山水人物花鳥、皆なその妙に臻り、院中の獨歩と稱せらる、この圖遠の筆となすべき何等の徵證なしと雖も、その筆墨の渾樸にして古意古調を帶べる處、確に遠の時代を距ること遠からざるを知る、布局の按排より推すに、或は琴棋書畫四幅中の一幅なるべきか。



第十三　敗荷鶺鴒圖　牧溪筆　雙幅之一

掛幅　紙本水墨　竪二尺六寸二分　橫一尺二分

表裝　一文字白茶地古錦襴　中白地安樂庵　上下紺地古錦襴

僧法常は牧溪と號す、蜀の人にして、無準範禪師に嗣ぐ、その畫は龍虎猿鶴蘆雁山水人物、俱に意に隨ひ墨を點じて之を爲す、意思簡當にして、粧飾を費さず、性英爽、酷だ酒を嗜み、寒暑風雨常に醉ふ、醉へば卽ち熟寢し、覺むれば卽ち朗吟す、南宋度宗咸淳年中の人なり、この雙幅、一は敗荷に配するに鶺鴒を以てし、一は枯蘆に翡翠を點ず、輕輕下筆、尤も生動の致を得たり、この畫もと東山御物と傳へ、寶永元年五月、泉州堺の伊丹屋源兵衞より鹿嶋九郎左衞門延元に讓る所にして、各、書狀を添ふ、その伊丹屋源兵衞の讓渡狀に曰く、「牧溪筆荷葉鶺鴒蘆翡翠之掛畫我等渡先祖持傳候處今度應御懇望讓進之候右之一軸東山殿義政公御物無紛之候尤可有御祕藏候以上」と、以てその傳世の久しきを知るべし。



第十四　枯蘆翡翠圖　牧溪筆　雙幅之一

掛幅　紙本水墨　竪二尺六寸二分　橫一尺二分

表裝　一文字白茶地古錦襴　中白地安樂庵　上下紺地古錦襴



第十五　栗鼠圖　傳牧溪筆

掛幅　紙本水墨　竪二尺九寸三分　横一尺一寸



第十六　觀音大士圖　傳張月湖筆

掛幅　絹本淡彩　竪二尺七寸一分　橫一尺三寸

張月湖は支那の畫史に考ふる所なし、たゞ君臺觀左右帳記元朝の下に『或作』月壺道釋人物』とあるのみ、我が邦に現存する月湖の作と傳ふるものを見るに、皆な無欵にして、又同一人の手に出でたるものにあらざるが如し、但だその圖樣は盡くこの種の墨畫式の觀音像にして大海の濱、岩石に踞し、傍に柳枝を挿みたる寶瓶を置き、或は俯して水中の月を觀、或は頭を擧げて懸瀑を仰ぐの姿をなせり、特にこの圖の如きは其の中にても優秀なる作にして、全部墨畫より成り、僅に身邊の粧飾具に金泥を點じ、最も生彩あるを覺ふ、之に比すれば、次葉の同じく月湖と傳ふる作は筆墨少しく劣れるが如きも、その月湖式なる點に於て、吾人は暫く傳説に從ふのみ、思ふに密教の六觀音の如き形式が次第に淘汰せられ、簡擇せられて、遂に此の墨畫式のものとなりしは、また宋世禪宗の消息と表裏をなすものなり。



第十七　觀音大士圖　傳張月湖筆

掛幅　絹本水墨　竪三尺四寸　横一尺四寸七分



第十八　柳陰繋馬圖　傳紀眞筆

掛幅　絹本淡彩　竪八寸五分　横七寸五分

馬は畜獸中の最も神駿なるものにして、その形體の美、殊に畫くに耐へたるものあれば、歷代の畫工往々にして深く工力を此に加ふ、穆王八駿圖、名馬圖、渥洼馬圖等の目、已に六朝官庫本中に見ゆ、唐にあつては曹覇、韓幹最も名手と稱す、近世趙文敏また山水人物の傍、屢、騰黃騕褭の姿を寫し、逼眞の妙あり、後の馬を畫く者、多く範を此に取る、この柳陰繋馬圖は傳へて紀眞の筆となす、紀眞は北宋の人にして范寬を學びて山水を能くせりと云ふ、此畫の手法を見るに北宗的風致ありて、文敏一派のものとは固より異る所あり、殊にこの圖に於て興味あるは、その必ずしも萬里一息の龍種を寫したるに非ずして、寧ろ垂老の蹇馬を畫きたるかと思はるゝことにあり、適、以て作家が寫生の摯實と精到とを窺ふに足るべし。

遂以て作家が寫生の眞實と精到とを窺ふに足るべし。

[illegible]種を寫したるに非ずして、寧ろ運筆の[illegible]を養ひたるかと思はるゝところにあり。[illegible]のとは固より異る所あり、殊にこの圖に於て興味あるは、その必ずしも萬里一息の[illegible]りて山水を描くのみと云ふ[illegible]の手法を脱るに非常的[illegible]あり、又[illegible]一派の上に[illegible]この[illegible]は[illegible]せず[illegible]人[illegible]は[illegible]。[illegible]しむ[illegible]の[illegible]を[illegible]。[illegible]は已に[illegible]の中に[illegible]の[illegible]にありて[illegible]を[illegible]近世[illegible]に[illegible]代の[illegible]工[illegible]にして深く工力を此に加ふ[illegible]王[illegible]圖[illegible]の[illegible]は[illegible]中の[illegible]にして其の[illegible]に[illegible]一[illegible]るものあ

第十八　柳商[illegible]圖　[illegible]

[illegible]　絹本淡彩　竪八寸五分　横七寸五分



第十九　阿彌陀諸菩薩圖　傳張思恭筆

掛幅　絹本著色　竪三尺五寸四分　横一尺九寸三分

張思恭は君臺觀左右帳記に北宋人となし、且つ人物、佛像、彌陀と注せるのみにて、畫史に其の名を逸す、前人或は圖繪寶鑑續纂に所謂『白思恭工に神佛を畫く』とあるを以て、我國に所謂張思恭はこの人を誤傳せしものならんとするものあり、そはともあれ我が邦に張思恭として傳へらるゝものを觀るに、固より一筆に非れども、盡く宋朝の樣式を傳へたる賦彩濃麗なる佛畫にして、殊に阿彌陀の立像に多しとなす、この圖は卽ちその一例にして、阿彌陀如來を中心とし、觀音、勢至、文珠、普賢、地藏等の諸菩薩を畫く、皆一樣に直立して徐ろに左方に進み、有緣の衆生を迎へんとするが如き風あり、姿勢面相より衣皺紋樣に至るまで、用筆精細にして、彩繪絢爛、尤も慈悲の意と莊嚴の趣とに於て工夫を加へたるものあるを覺ふ、卽ち次葉地藏菩薩に至つては筆意稍異るが如きも、その形式は同一系統に屬し、猶ほ張思恭式佛畫の遺意を見るべし。



第二十　地藏菩薩像　傳張思恭筆

掛幅　絹本著色　竪三尺五寸四分　横一尺七寸三分





第二十一　觀音大士圖　傳白良玉筆

掛幅　紙本水墨　竪二尺九寸三分　横一尺三分五厘

表裝　一文字廻風帶紫地印金　中茶地印金　上下茶地唐物緞子

白良玉は錢塘の人、工に道釋鬼神を畫く、南宋寧宗理宗の兩朝に畫院待詔たり、この圖は水邊石上に踞せる觀音を畫き、上方雲中に韋駄天を添ふ、落筆尤も遒逸にして、用墨の技、自然に其の法を得たり、思ふに宋末禪宗大に行はれ、佛畫も亦た多く水墨を悦びたりしが、かの月湖式の觀音の如きは、極意簡淨を旨とすと雖も、猶ほ畫師の習氣あるを免れず、此れは乃ち清空一氣、多く意を經ずして、成るが如くにして、自然神到せるを覺ふ、我が邦啓書記龍派の徒の畫ける白衣觀音は、學ぶ所正に這の邊にあり、此れに非れば以て談禪の具に供するに足らざるなり。



第二十二　陳後主玉樹後庭花圖　傳盛子昭筆

掛幅　絹本著色　竪五尺六寸七分　横三尺四寸四分

陳の後主叔寶位に卽いて佚遊度なし、至德二年、光昭殿前に於て臨春、結綺、望仙の三閣を起し、後主自ら臨春閣に居り、張貴妃は結綺閣に居り、龔孔二貴嬪は望仙閣に居り、複道を以て往來を通じ、日に嬖臣狎客と長夜の飮をなし、政刑大に紊る、後主最も鄭聲を好み、自ら玉樹後庭花の曲を作り、左右に之を歌はしむ、此の圖卽ち禁苑内に屛障を設けて後主几に倚て坐し、妃嬪之に侍し、一女阮咸を奏するを畫く、傳へて元の盛子昭の筆となせり、畫史會要に曰く、盛懋字は子昭、善く山水人物花鳥を畫く、始は陳仲美を學び、略ほ其の法を變ず、精緻餘あり、特に巧に過ぐと、この畫また人物花木器什、皆な工細の筆を揮ひ尤も姸麗綺靡の致を極む。



第二十三　柳堤晩歸圖　傳馬麟筆

掛幅　絹本淡彩　竪二尺八寸二分　横一尺三寸九分

一林の枯柳、幾たびか離人の攀折を經て、孤影蕭疎、また宿鴉を藏するに由なし、江上一路、晩風蘆葦を搖し、淅瀝として聲あり、歸家の牧夫、牛背穩かに夢を載せて煙靄微茫の裡に入る、かくの如き景致、已に南宋畫院諸家の好題目たり、是に於てか昔人或は此の畫を鑑して馬麟の筆となすものあり、麟は實に遠の子にして、家學を能くし、畫院祗候たり、遠多く己の畫を以て麟の畫としたりといふ、此の圖果して麟の手に出でたるや否や明ならざるも、また南渡諸傑の遺意を傳ふるものあることは否むべからず、その用筆の和柔にして、多く墨色濃淡を以て一幅の畫調を構へたる處、最も蕭條荒落の致を得たり。



第二十四　牧牛圖　傳張芳汝筆

掛幅　絹本水墨　竪二尺一寸　横一尺二寸三分

表裝　一文字風帶紫地印金　中茶地燒切　上下焦茶地唐物風通

張芳汝はまた君臺觀左右帳記元人の條に其の名を擧げ、上の中品に列して山水人物牛と注せるのみ、その傳考ふる所なし、今我が邦に遺存せる張芳汝と傳ふるものを見るに、多くは山水中に牧童を寫せるものにして、また一二の山水畫あり、こゝに載する所は卽ち樹下に牧牛が首を擧げて木葉を嚙むの圖なり、思ふに能阿彌が山水人物の外に特に牛といへる一字を添えたるを觀ても、その畫牛の名手たりしを知るべし、この畫卽ち其の一例とも謂ふべきものにして、多く淡墨を以て輕輕に灑掃し去り、間〻濃墨を點じて全幅の生意を助く、而かもその濃淡の變化甚だ强烈ならず、能く夷曠蕭散の致を得たり。



第二十五　栽松道者圖　傳梁楷筆

掛幅　絹本水墨　竪二尺七寸四分　横一尺三寸四分

五祖弘忍大師の前身を以て破頭山中の栽松道者となすは、一種の禪敎者流によつて作られたる小說なり、其の說にいふ、栽松道者嘗て破頭山中に於て四祖道信に謁す、信曰く、汝已に老いたり、若し再び來らば、吾尙ほ汝を遲つべしと、道者乃ち去て水邊を行く、一女の衣を浣ふを見て寄宿を求む、女は周氏の季子なり、曰く我に父兄あり、往いて之に問ふべしと、道者諾して去る、女家に歸りて輙ち孕む、已にして一子を生む、長じて道信に遇ひ、法を破頭山に得たり、之を弘忍大師となすと、この圖卽ち道者が山を下らんとするを畫きしなるべし、畫者は傳へて梁楷となす、楷は南宋嘉泰間の畫院待詔賜金帶たり、上に建仁淸拙の贊あり、淸拙正澄禪師は元國福州の人、愚極慧の法嗣たり、嘉曆元年我が邦に來朝し、建長、建仁、南禪を董し、再び建仁に住す、曆應二年正月十七日示寂す、壽六十六。


建仁清拙題
宿客無因嫁搦胎
周家若是龍門女
歲寒那守下山來
一寸霜婆手自栽

第二十六　夏景山水圖　趙大年筆　雙幅之一

掛幅　絹本著色　竪八寸　橫九寸五分

趙令穰、字は大年、宋の宗室なり、仕へて崇信軍節度觀察留後に至る、嘗て端午の節に因つて其の畫く所の扇を進む、哲宗之を嘉し、國泰二字を書して之に賜ふ、一時榮となす、唐の畢宏、韋偃の畫蹟を得て之を師とし、歲月ならざる間に、便ち能く眞に逼る、その作る所多く小軸にして甚だ清麗なり、雪景は王維に類し、汀渚水鳥を寫して江湖の意あり、又東坡を學びて小山叢竹を作る、思致殊に佳なり、但だ筆意柔嫩なるを覺ふ、寔に年少奇を好むによる耳、若し稍〻豪壯を加へ、餘味あるに至らば、當に小李將軍の下に立たざるべきなり、令穰雅より美才高行あり、善く文を屬し、又草書を工にす、歿して開府儀同三司を贈られ、榮國公に追封せらる。



第二十七　夏景山水圖　趙大年筆　雙幅之一

掛幅　絹本著色　竪八寸　橫九寸五分



第二十八　樓閣山水圖　傳任月山筆　雙幅之一

掛幅　絹本著色　竪三尺八寸六分　横一尺八寸七分
表裝　一文字風帶上代紗　中古金襴本願寺切　上下安樂庵

元の任仁發、字は子明、月山と號す、松江の人なり、仕へて都水庸田副使、浙東宣慰副使となる、水利書十卷を著す、尤も馬を畫くを以て名あり、嘗て天旨を奉じて渥注天馬の圖を畫く、又李北海を學びて能書の名あり、この畫傳へて其の人の筆となす、思ふに元代にありて最も南宋劉李馬夏の正脈を傳ふるものを孫君澤となし、任月山となす、風骨の踈宕は遂にかの畫院の四傑に及び難しと雖も、尤も用意の縝密と運筆の老健とを以て勝る、この圖はもと雲州家の珍襲にかゝる、其の松竹巖石の描法已に遒勁挺拔を極め、屋宇界線はまた甚だ謹嚴にして苟くも筆を下さず、人物服色器什の細に至るまで微として盡さゞるなし、而して兩幅を對看して構局の極めて熨貼にして變化あり、工夫と骨力との兼ね到れるを見る、我が邦に傳はれる月山畫中の尤物となすべし。



第二十九　樓閣山水圖　傳任月山筆　雙幅之一

掛幅　絹本著色　竪三尺八寸六分　橫一尺八寸七分

表裝　一文字風帶上代紗　中古金襴本願寺切　上下安樂庵



第三十　戲嬰圖　傳蘇漢臣筆　雙幅之一

掛幅　絹本著色　竪四尺五寸二分　橫二尺五寸

北宋の宣和畫院に待詔たりし蘇漢臣は最も嬰孩の畫を善くし、後世この種の遺品には、多く漢臣の名を附せり、この戲嬰の圖も亦た前人鑑して漢臣の筆となすものなり、然れども之を以て直に北宋の作とせんには、猶ほ許多の杆格あるを免れず、思ふに此くの如き貴族の兒童の遊戲する狀態を畫くことは、六朝の世已に之あり、趙宋以後花鳥畫と共に最も畫院に流行す、今この圖を見るに精緻周到なる彩筆を以て細かに人物花木禽獸を畫きて、濃麗と渾厚と兩つながら得たり、是れ正しく北宋院體の嫡嗣にして、漢臣にあらずと雖も、また蘇氏一派の風格を傳へたるものなることは否むべからず。



第三十一　戲嬰圖　傳蘇漢臣筆　雙幅之一

掛幅　絹本著色　竪四尺五寸二分　横二尺五寸



第三十二　牧童圖　傳范寬筆

掛幅　紙本水墨　竪八寸三分　横一尺一寸一分

表裝　一文字風帶茶地上代紗金　中萠黄地捻金毛織
　　上下茶地唐物襴絹

范寬名は中正、字は仲立、性緩なり、世人之を范寬と呼ぶ、山水は李成荊浩を師とす、嘗て自ら語つて曰く、人を師とせんよりは物を師とせんに若かず、物を師とせんよりは心を師とせんに若かずと、乃ち居を終南太華に卜し、專らその眞景を寫す、實に李營邱と共に北宋一代畫山水派の開山たり、この圖その人の筆と傳ふ、その布置を觀るに、先づ盈尺の小幀にして、中央に樹木を畫き、水流を前にして煙靄慘澹の裡に對岸を望む、臥牛を閑却して一個の牧童は水に臨みて綸を垂る、その多く黑色の濃淡を以て山水樹石の布置を作り、甚だ皴文を用ひず、人物と牛との描寫に於て却て周到なる用意を費せし處、頗る墨畫の古意を得たるものあり。



第三十三　風雨山水圖　夏珪筆

掛幅　紙本水墨　竪二尺九寸　横一尺一寸

表装　一文字風帯紫地印金　中萠黄地印金　上下唐物緞子

圖繪寶鑑に曰く、夏珪字は禹玉、錢塘の人なり、南宋寧宗皇帝の朝、畫院待詔賜金帶たり、善く人物を畫き、高低醞釀、墨色傅粉の色の如し、筆法蒼老にして墨汁淋漓、奇作なり、雪景は全く范寛を學ぶ、院中人の畫山水、李唐より以下、その右に出る者なしと、我が邦夏珪と傳ふる山水畫頗る多く、また尤物に富む、然れども一も夏文彦の所謂人物畫及び雪景を傳へず、之を彼の地歷世の鑒藏書に撿するも、亦た皆な山水を擧げて人物に及ばず、寔に怪むべしとなす、然れども其の得意の山水に至つては、則ち意蒼古を尙びて、筆峭健を悅ぶ、固より馬遠と共に千古に獨步たるに足れり、この風雨山水、下に欵識二字あれども讀み難し、但だ昔人多くこの欵ある者を定めて夏珪となす、また見る所ありて然るか、その快筆一掃の處、尤も風骨の疎宕なるを覺ふ、宋畫たること疑なし、傳へて東山御物となす、上に雜花室の印あり、是れ又室町時代に流傳したる支那畫に多く見らるゝ鑒藏印なり、別に養朴常信の審定書を添ふ。



第三十四　草座釋迦圖　傳李龍眠筆

掛幅　絹本著色　竪三尺三寸九分　横一尺六寸

釋尊已に伽闍山に入り六年の苦行を積み、卽ち菩提場に詣る、時に淨居天白し言ふ、過去諸佛皆な草座に坐して正覺を取れりと、帝釋天王卽ち其の身を化して刈草人となり、草を刈取して釋尊に奉ず、其草淨妙なり、釋尊卽ちその一把を取り、手自ら執持し、安詳徐步して菩提樹下に向ひ、以て草座を爲りて之に坐し、遂に魔怨を降伏して正眞覺を成せりと、事は本行經に見えたり、此の圖卽ち苦行中の釋尊が草座に端坐せるを畫く、次葉の出山相と共に李龍眠の筆と傳ふるものにして、是等の畫題は宋元の禪僧に最も喜ばれたる所なりとす、李公麟字は伯時、北宋熙寧中の進士なり、官朝奉郞に至る、元符三年龍眠山に歸老し、因て龍眠居士と號す、山水人物、道釋鬼神、種種妙に臻り、宋畫第一の名あり。

種種地に據り、宋畫第一の名あり。

宣和畫譜に云ふ、元符三年龍眠山に歸老し、因て龍眠居士と號す。山水人物道釋鬼神

宋元の畫評に最も喜ばれたる所なり。李公麟字は伯時、北宋熙寧中の進士なり。

來せるを畫く、衣葉の出山相と共に李龍眠の筆と傳ふるものにして、是等の畫題は

て正覺を成せりと、亦は本行經に見えたり。此の圖が如き者百中の釋尊が草座に臨

討く安詳徐歩して菩提樹下に向ひ因て草座を爲りてこれに坐し、遂に魔衆を降伏し

となりて草を刈取りて釋尊に奉す。其草淨妙なり。釋尊即ちその一把を取り、手自ら執

過去諸佛皆な草座に坐して正覺を成ぜり、と。帝釋天王即ち其の身を化して刈草人

釋尊已に伽闍山に入り六年の苦行を積み、頓ち菩提場に詣る時に淨居天白して言ふ

掛幅　絹本著色　竪三尺三寸九分　横一尺六寸

第三十四　草座釋迦圖　傳李龍眠筆



第三十五　出山釋迦圖　傳李龍眠筆

掛幅　絹本著色　竪二尺五寸七分　横一尺二寸三分



第三十六　丹霞靈照圖　傳李堯夫筆

掛幅　紙本水墨　竪一尺一寸一分　横一尺二寸
表裝　一文字風帶紫地印金　中茶地紗金　上下御納戸地繻珍

龐居士、名は蘊、唐の貞元の初、石頭和尙に謁して旨を會す、丹霞天然禪師と友たり、一女あり、靈照と名く、常に竹漉籬を製し、鬻ぎて以て朝夕に供す、丹霞一日居士を訪ふ、門に當りて靈照女の菜を洗へるを見、問ふて曰く、居士在りや否やと、女菜藍を放下し、手を歛めて立つ、師又問ふ、居士在りや否やと、女籃子を提げて去る、師遂に回る、此の畫卽ち此の一場の葛藤を寫したるものにして、中央に丹霞を畫き、之と對して靈照の藍子を放下して直立せるを畫く、筆者は傳へて李堯夫となせり、この人また支那の畫史に見えず、たゞ左右帳記に元人として道釋、人物、鬼神と注せるを見るのみ。



第三十七　彌勒菩薩像　筆者不詳

掛幅　絹本著色　竪三尺六寸七分　横二尺一分

支那に於ける禪宗の流布はその佛畫の形式を變じ、專ら水墨減筆の手法を發達せしめ、かの觀音に於ても白衣、水月の如き簡淨なる儀相を尙ぶに至らしめたり、蓋し不立文字を標榜する僧徒の、形體を擺脫して、直に實相を看取せんとつとめたるの致す所なり、然れども此の種の佛畫は含蓄餘りありて、莊嚴足らず、世俗の信仰を繫ぐには必ず丹靑金碧に待たざるべからず、是に於てか古代密敎式の佛畫はその形式を變じて却て流俗の間に保存せらる、この第三十七圖より第三十九圖に至る三幀の佛畫は恰かもその例として見るべし、第三十七圖は彌勒菩薩にして、後世摩耶夫人の形を借りて現さるゝことあれば、是れはその一例ならずやと思ふ、第三十八圖は恐く觀音像なるべきが、胸間に一個の十字架を帶ぶ、卽ち聖母摩利亞の變形にあらざるなきか、第三十九圖は准胝觀音なるべし、凡そ是等の佛畫、我が邦に傳ふるものと形相大に異り、的確にその尊像の名を指すべからず、暫く吾人の臆見に從ひて名稱を附すと雖も、敢て妄に之が解說を施さず、亦古人闕疑の旨に依るといふのみ。



第三十八　觀音大士像　筆者不詳

掛幅　絹本著色　竪五尺一寸七分　横二尺一分



第三十九　准胝観音像　筆者不詳

掛幅　絹本著色　竪三尺六寸八分　横一尺八寸七分



第四十　牡丹白鷗圖　傳王若水筆

掛幅　絹本著色　竪三尺六寸四分　横二尺三寸四分

元の王淵、字は若水、澹軒と號す、錢塘の人なり、趙子昂の指授を得て畫法を學ぶ、山水は郭熙を師とし、花鳥は黃筌を師とし、人物は唐人を師とす、尤も花鳥竹石に精しく、當代の絕藝たり、昔人評して謂ふ、天機溢發、古に背て而かも古に泥まざるものなりと、思ふに花卉翎毛の一派は唐世に淵源し、宋代に汎濫す、徽宗の畫院を置いて生徒を養ふや、尤も斯の道を推奬し、動植の寫生、その全盛を極む、唯だ末流頽波往往にして形體の模倣に走りて、神情の流動を遺る、遂に院體の譏を免るゝこと能はず、然れども王澹軒の如きは趙宋を距ること未だ遠からず、猶ほ南渡諸傑の遺韻を傳ふるものあり、宜に元明兩朝院體花鳥の倡首たり、因みにいふ、此の畫は、明治四十四年昭憲皇太后の興津なる我家の別邸に幸し給ひしとき、玉座の壁間を飾るの恩光に浴したるものなりと。



第四十一　花鳥圖　王立本筆　雙幅之一

掛幅　絹本著色　竪五尺三寸　横三尺二寸七分

院體の寫生家好むで異木珍禽を畫く、古言ふ徐熙は野逸黃筌は富貴と、就中後蜀と宋とに仕へて專ら禁中に給事せし黃筌は實に院體の濫觴にして、後の諸人之を宗とせざるなし、蓋し又その著色の穠麗陸離目を奪はんを欲するなり、この圖の如き、その一例とすべし、畫者は元の王立本、會稽鄞の人にして花卉を善くす、彼の土にては遂に僻陬の小畫師に過ぎざりしも、その作品は地理上の關係より、夙に我が邦に流入せしものと見え、已に能阿彌の手記に著錄せらる。



第四十二　花鳥圖　王立本筆　雙幅之一

掛幅　絹本著色　竪五尺三寸　横三尺二寸七分

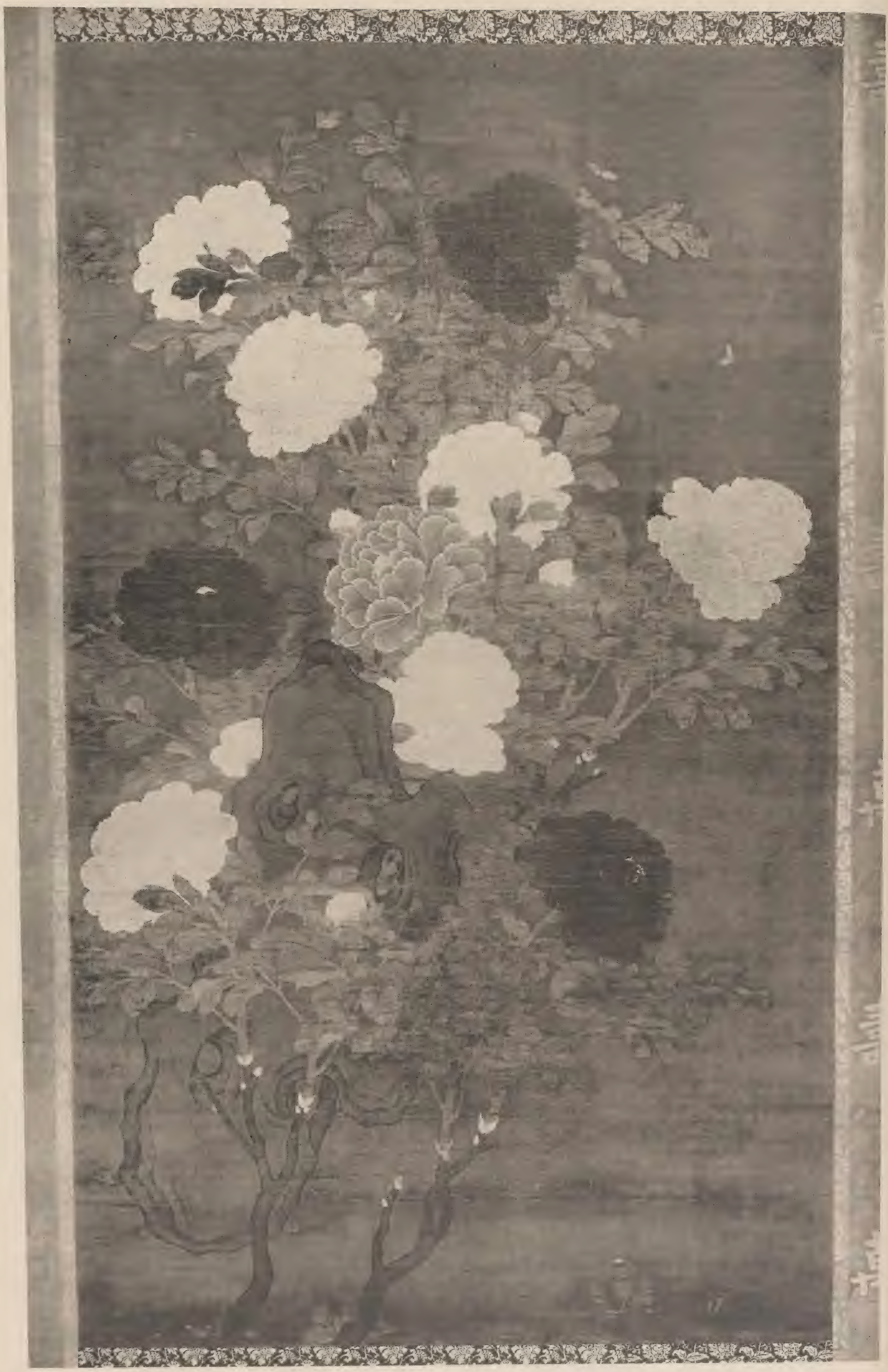


第四十三　牡丹花圖　傳徽宗皇帝筆

掛幅　絹本著色　竪四尺八寸八分　横二尺九寸

表裝　一文字縹地古金襴　中萠黄地古金襴　上下萬壽緞子

北宋の徽宗皇帝、諱は佶、神宗の第十一子なり、嘗て侍臣に謂て曰く、朕萬機の餘暇、別に他好なし、唯だ畫を好むのみと、因つて古今名人の畫を集め、上曹弗興より下黄居寀に至るまで、輯めて一百帙となし、十四門を列す、總て一千五百件、名けて宣和睿覽集といふ、前世圖籍、未だ此くの如き盛なるものあらず、帝尤も好みて翎毛を畫き、多く生漆を以て點睛す、隱然豆許、高く紙素に出で、殆ど活動せんと欲す、衆工及ぶものなし、又墨竹花石を善くし、自ら一家を成す、畫後の押字には天水及び宣和政和の小璽を用ひ、或は瓢印蟲魚篆文を用ふ、元豐五年生れ、建中靖國元年卽位し、宣和七年內禪し、建炎元年北狩し、紹興五年沙漠に崩ず、壽五十四。



第四十四　寒汀雪鷺圖　傳徐熙筆

掛幅　絹本水墨　竪三尺七分　横一尺四寸五分

表裝　一文字風帶白地古金襴　中及上下安樂庵

支那の花鳥寫生には院體以外に猶ほ他の一派あり、彼の院體の黄筌に出で、好むで宮禁の花鳥を畫きしに反し、此れは徐熙を宗として多く江湖の景致を寫す、郭若虚の論に曰はく、徐熙は江南の處士にして、志節高邁、放達不羈なり、多く江湖にある所の汀花野竹、水鳥淵魚を狀す、今の世に傳ふる鳬雁鷺鷥、蒲藻蝦魚、叢艷折枝、園蔬藥苗の類是なり、又翎毛は形骨輕秀を貴びて天水色を通ずと、而して院體の專ら著色を悅びたるに對して、此の派の時に水墨を選びたるも、亦自然の勢なるべし。



第四十五　麝猫圖　宣宗皇帝筆

掛幅　絹本著色　竪二尺一分五厘　横一尺二分五厘

表裝　一文字白地印金　中紫地印金　上下安樂庵

明の宣宗、姓は朱氏、諱は瞻基、長春眞人と號す、仁宗の長子なり、卽位して宣德と建元す、帝天藻飛翔、雅より詞翰を尙び、讀書一目數行、經史百家涉獵せざるなし、尤も繪事に精く、山水人物花果翎毛草蟲、往往にして宣和と勝を爭ふ、圖上常に年月及び賜臣の姓名を書し、廣運之寶、武英殿寶、雍熙世人等の印を用ふ、洪武三十一年生れ、宣德十年正月崩ず、壽三十八、諡して章といふ、思ふに成祖以後昇平日久しく、海內深く朱氏の德澤に浴し、文學藝術、炳焉として蔚興す、此時に當りて又この好文の王者を仰ぐ、偶然なりとせんや、この圖には廣運之寶の印を押し、宣德丙午御筆と題せり、卽ちその卽位元年二十九歲の作なり。



第四十六　水仙圖　傳陶復初筆

掛幅　紙本水墨　竪一尺七寸五分　横一尺一寸二分

元の陶復初、字は明本、介軒老人と號す、天台の人にして台州儒學教儒たり、從事郎樂清縣尹を贈らる、墨竹は李薊邱父子を師とし、著色竹も亦甚だ佳なり、また山水を能くす、この水仙の圖は傳へて其の人の筆となす、先づ鉤勒を以て精細に花葉を描き、淡墨の暈染を施してその陰陽向背を明にし、下に強く墨痕を點じて怪石を畫く、其の手法極めて謹密にして而かもかの畫院の習氣を帶びず、此の清壯の筆墨に非れば、以て淩波仙子の傳神たるに堪えず。





第四十七　墨梅圖　傳陸復筆　雙幅

掛幅　紙本水墨　各竪三尺八寸一分　横一尺二寸一分

明の陸復、字は明本、吳江の人なり、畫梅を善くし、梅花主人と號す、按ずるに墨竹、墨花、墨梅は北宋の世に始まり、最も東坡、山谷等諸文人の間に悅ばる、蓋し當時墨畫の發達は、自らこの色相を離れて寫意を主とする新手法の出現を促せしなり、按ずるに僧仲仁の梅譜に曰く、華光仲仁最も梅を愛し、其の方丈に數本を植え、花の放く毎に牀を其の下に移して終日吟咏す、偶、月夜未だ寢ねず、窻間疎影横斜、蕭然愛すべきを見て、遂に筆を以て其の狀を規し、淩晨之を見るに、殊に月下の想あり、此れに因つて畫梅の三昧を得たり、黃山谷見て之を美して曰く、嫩寒淸曉、孤山籬落間を行くが如し、但だ香を缺くのみと、好事者傳へて以て墨梅の始となす。



第四十八　傅説耕野圖　傳馬興祖筆　雙幅之一

掛幅　絹本淡彩　竪四尺三寸六分　横二尺三寸四分

傅說は古代支那に於ける傳說的英雄なり、固より賢德あり、傅巖の下に隱る、殷の高宗夢に之を得、用ひて以て相となす、此圖卽ち傅說が傅巖の下に耕せるを、高宗來り訪ふを畫けり、他の一幅は草廬三顧の圖なり、諸葛孔明襄陽に隱耕す、人あり劉玄德に謂て曰く、孔明は臥龍なり、宜しく駕を枉げて之を顧みるべしと、玄德乃ち三たび其の草廬を訪ふて始めて見るを得、因つて相となし、霸業を成就し、漢室を再興す、畫者は馬興祖と傳ふ、卽ち馬遠の祖父にして、南宋紹興年中畫院待詔たり、この雙幅もと石州濱田の松平侯に出で、侯移封の後に雲州有澤氏に傳はる所といひ、別に探幽の書牘を添ふ。



第四十九　孔明草廬圖　傳馬興祖筆　雙幅之一

掛幅　絹本淡彩　竪四尺三寸六分　横二尺三寸四分



第五十　山水圖　傳劉松年筆

掛幅　絹本水墨　竪二尺九寸七分　横一尺五寸三分

劉松年は錢塘の人なり、淸波門に居る、俗に呼びて劉淸波といふ、南宋紹熙年中の畫院學生なり、張敦禮を師とし、工に人物山水を畫き、神氣淸妙、遠く師に過ぎたり、寧宗の朝、耕織圖を進め、旨に稱ひ、金帶を賜ふ、李唐、馬遠、夏珪と並びて南宋の四大家と稱せらる、洵に北宗畫山水派の泰斗なり、今此の圖を見るに先づ松樹を中心として前に巖石を畫き、後に突兀たる奇峰を作り、松樹の下に小亭を添え、高士二人卓を圍みて平遠の江山を指顧す、構局雄大、筆墨尤も遒勁にして矗獷、濃淡皴擦、行くとして佳ならざるなし、松年筆といへる傳説は暫く措くも、北宗門派の中、猶ほ野狐に墮せざるものといふべし。



第五十一　阿彌陀如來像　傳吳道子筆

掛幅　絹本著色　竪三尺六寸七分　横一尺五寸七分

阿彌陀如來は西方淨土の主尊として觀音と共に古來渇仰の中心たり、而して觀音は禪宗の隆盛なると共にかの白衣水月等の墨畫を主としたるもの現はれしが、彌陀に至りては未だ此の種の像あるを聞かず、蓋し極樂淨土の思想は最も金碧莊嚴によりて其意を助くること多ければなるべし、此の像またその一例にして、如來は蓮花を踏み、圓光を負ひ、掩ふに巨大なる蓮辨を以てし、雲中に出現したる像として畫かる、恰かも我が邦の來迎圖の如し、其筆者は唐の吳道子と傳ふ、而かもその纒衣の制、及びその紋樣の盡く圓形をなせる、戰掣筆を以て畫かれたる衣端の稜角をなして垂下せる、或は兩手の印相、皆なかの張思恭式の彌陀像と形式を一にするものあるを見るべし。



第五十二　羅漢圖　傳禪月筆

掛幅　絹本淡彩　竪三尺二寸五分　横一尺五寸八分

羅漢の像を畫くことは、唐代已に吳道子の名手あれども、その蹟考ふべからず、五代に禪月大師あり、宋に李龍眠あり、共に擅場と稱す、この二人者の畫風は、今その眞本を見るを得ずと雖も、之を載籍に徵し、又之を後世の祖述者に視て、略ぼ彷彿を得るに難からず、蓋し羅漢像は禪宗に關係深きものなれば、宋元明の三朝に我が邦より彼の地に渡れる禪僧の携へ歸れるもの多く、比較的多數の優品を現存せるなり、今その略をいへば、禪月の羅漢は古人の所謂龍眉大目、朶頤隆鼻、胡貌梵相、其の態を曲盡せるものにして、之に反して李龍眠は白描彩繪共に描寫精到にして筆路深穩、尤も人間的性情を具へたり、こゝに載する所の羅漢は卽ち禪月の形式を傳へたるものと見るべし。



第五十三　華陽眞人影　傳西金居士筆

掛幅　紙本著色　竪三尺　横一尺二寸五分

表裝　一文字風帶茶地燒切　中茶地絽金　上下唐物

陶弘景字は通明、丹陽秣陵の人なり、幼にして異操あり、年十歳葛洪の神仙傳を讀みて便ち養生の志あり、長ずるに及び齊の高帝に引かれて諸王の侍讀となる、永明十年朝服を脱して神武門に挂け、句容の句曲山に隱れ、自ら華陽隱居と號す、弘景始め東陽の孫遊岳に從ひ、符圖經法を受け、名山を徧歷し、仙藥を尋訪し、澗谷を經る每に必ず其の間に坐臥し、吟咏盤桓す、永元の初、三層樓を築きて之に處り、外物に交らず、辟穀導引の法を修む、梁の大同二年卒す、年八十五、諡して貞白先生といふ、畫者西金居士は名字略傳を知らず、たゞ左右帳記元人の下に居士の羅漢を擧げたるのみ、我邦從來また居士の名を冠したる遺品多けれども、多くは後人の假托に出で、何れが眞筆なりや明にしがたし。



第五十四　少康法師圖　傳西金居士筆

掛幅　絹本著色　竪三尺二寸二分　横一尺四寸七分
表裝　一文字廻風帶縹地黑船　中萠黃地安樂庵　上下白地安樂庵銀襴

唐の少康法師、俗姓は周氏、年十五にして法華楞嚴等の五部に誦通す、貞元の初洛下白馬寺に至り、殿中文籍光を放つを見て、之を採るに乃ち善導和上西方化導の文なり、深く證悟する所あり、新定に往いて行化せんとす、郡人識るものなし、師乃ち小兒を誘ひて曰く、念佛一聲せば汝に一錢を與へんと、兒輩聲に隨つて之を念ず、月餘にして孩孺の念佛して錢を覓むるもの衆し、師又曰く、能く念佛十聲せば一錢を與へんと、此くの如きこと一年、少長貴賤となく師を見るもの皆な阿彌陀佛を稱し、念佛の聲道路に盈滿す、貞元十年乃ち烏龍山に淨土の道場を建つ、二十一年十月三日逝く、後人師を指して後善導となすといふ、この圖卽ち之を畫きしものなり。



第五十五　天台大師影　傳西金居士筆

掛幅　絹本著色　竪五尺八寸八分　横三尺三寸六分

天台山修禪寺智者禪師智顗、俗姓は陳氏、梁の大同四年を以て荆州華容縣に生る、十八歲父母を失ひ、卽ち出家して南岳大師に謁し、法華の深旨を修む、瓦官寺に法を說くこと八年、陳の大建七年、三十八歲にして台州の天台山に隱棲す、隋の煬帝深く師に歸仰し、爲めに齋會を設けて菩薩戒を受け、又荆州に玉泉寺を建てゝ師を奉す、師之によりて法華玄義、法華文句、摩訶止觀の三部を說く、天台の宗義、實に師によりて大成せり、隋の開皇十七年十一月廿四日示寂す、年六十、隋主諡して智者大師といひ、又天台大師と稱す、この圖卽ちその影像なり。



第五十六　草衣文殊圖　傳雪澗筆

掛幅　絹本著色　竪三尺六分　横一尺三寸一分

草衣文殊は宋朝禪宗の流行と共に現はれ來りし一種の樣式にして、歷世の尊宿、その圖に頌語を題するもの多し、この畫またその一例なり、傳へて雪澗の筆となす、雪澗は左右帳記に人物、尤も文殊に長ずとあり、この外見る所なし、圖上に大智周噩の賛あり、周噩、字は嚴中、九條經敎の第七子なり、夙に出家し、春屋の室に投じて大事を發明し、又內外の書を閱して頗る雅思あり、將軍義持其の德を慕ひ、相國寺に住せしむ、後に天龍、南禪諸寺に遷り、晚年西山の持地院に隱栖し、正長元年六月二十六日寂す、壽七十、勅諡して智海大珠禪師といふ、茲には應永龍集乙未夏五の欵あり、卽ち應永二十二年なり。



第五十七　漁樂圖　葉廣筆

掛幅　絹本淡彩　竪四尺七寸五分　横二尺四寸六分

明の葉廣は廬州府志に『巢縣の人にして、其の漁樂圖は遠近に珍とせらる』と云へるを見るのみにして、その畫統並に時代を明にすること能はず、玆に載する所の作も亦た漁樂圖の一例なり、董其昌云へることあり、宋の時の名手、巨然李范諸公皆な漁樂圖あり、此れ烟波釣徒張志和より起る、後人之を蒙り、多く意を漁隱に寓す、元季尤も多し、蓋し四大家皆な江南葭菼の間にあり、漁釣の趣を習知するが故なりと、此の圖の作者の如きも亦たその意を祖述して、而かも之を現すに北宗畫の形式を借りたるものと見るべし、綠陰の下、舟を繫きて笛を吹く、萬頃の煙波を領取せる漁童の風流想ふべく、是れ頓てまた作者が心境に外ならず、因みにいふ、この畫は征淸の役、明治天皇の西狩して大纛を廣島に駐め給ひしとき、之を行在に進めて宸賞を邀へしものなり。


葉廣

第五十八　蓮花圖　筆者不詳　酒井抱一補筆

掛幅　絹本著色　竪二尺七寸　横一尺四寸一分

瓶子に數朶の開敷蓮華を挿む、已に通常の折枝花にあらず、恰かも供佛の具なるに似たり、また一奇構なりといふべし、一隅に文化十二年夏日等覺院權大僧都補之といへる小楷十六字の欵あり、卽ち抱一上人の補修になりたるものなること明なり、酒井抱一、寛政九年江戸築地本願寺に於て得度し、等覺院と號し、權大僧都に補せらる、文化十二年は恰かもその五十五歳の時にかゝる、上人が畢生の事業は實に光琳一派の手法を繼承して、自ら機軸を出せしにあり、然れどもその初また宋紫石に就て明畫を學びたりと傳へられ、殊に支那の名蹟に於て研鑽甚だ力む、此の補筆の如きも頗る巧妙にして痕跡を露さず、工手なりといふべし



第五十九　樓閣山水圖　睡猿筆

掛幅　絹本著色　竪六尺　横三尺二寸三分

この圖何人の作なるを知らず、上に落欵睡猿云々の十五字あり、草體讀み難く、二個の印文また漫漶して辨ずるを得ず、その睡猿といへるは恐く作者の別號なるべく、暫く定めて睡猿の筆といふ、その畫は卽ち尋常の巨幅にして先づ樓閣を畫き、白壁を繞し、烟靄蒼茫の中に八角多層の高塔を現し、樹木を作り、月を添ふ、樓上二個の仰ぎて月を觀る小人物あり、壁外また二人の燈を執りて道を行くあり、樹木は全く點葉法より成り、樓臺も亦た謹密なる界線法より成る、その筆技の精細を以て此の大局を塡めて繁汰の感なく、巧に淡雲微月の情趣を寫し得たるは、まさに凡手にあらず。



第六十　達磨大士像　陳賢筆

掛幅　紙本著色　竪四尺二寸五分　横一尺九寸二分

明の陳賢、字は希三、太玄道人と號す、崇禎十六年蔡道憲に從ひ節に死す、その好みて觀音を畫きしことは、我が邦に現存せる遺品に徵して推すを得べく、又畫上に多く隱元、木庵等の讚語を題せるを見れば、その畫の黃檗諸僧によりて將來せられしものなるを知るべし、こゝに載する所のものは、達磨大士の像なり、その面貌に強く暈染を施して、恰かも西洋畫法に似たるが如きものあるは、また他の觀音像と同一の技巧より成る、上に隱元の頌あり、隱元諱は隆琦、俗姓は林氏、明の福州福清の人、閩中の黃檗鑑源に參して旨を得たり、承應三年將軍家綱の請によつて來朝し、始め法を興福寺に開き、次で崇福、普門に移り、後に地を山城宇治に賜ひて、黃檗山萬福寺を創む、後水尾法皇並に家綱歸依最も深し、寛文十三年四月大光普照國師の號を賜ふ、尋で寂す、年八十二、實に本邦黃檗宗の始祖なり。



第六十一　柳塘戲鴨圖　沈南蘋筆

掛幅　絹本著色　竪四尺八分　横一尺七寸八分

沈銓、字は衡齋、南蘋と號す、呉興の雙林鎭の人なり、工に花卉翎毛を寫し、設色妍麗にして愛すべし、日本國、使を遣し來り迎ふ、海外に留ること三年、歸る時得る所の金帛、悉く之を戚友に散給し、橐仍つて蕭然たりと畫友錄に見ゆ、その長崎に來りしは享保十六年にして、彼の土にあつてはその名甚だ顯はれざりしも、新奇を好む邦人の爭ふて之を學びし爲め、その畫格大に行はれ、遂に一新流派を生む、南蘋の寫生派といふもの是れなり、他の伊孚九、江稼圃、費漢源の輩と共に、江戸時代の繪畫發展史上最も忘るべからざる來朝異邦人なり。


南蘋老人沈銓寫